

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART

vol. 9

青木コレクション名品展

—知られざる広重の肉筆を中心に—

一九九九年三月三十日(火)～五月九日(日)



広重と山下りん

山には雪がどっさり積もって、私のようなスキー・ファンには有り難い今年の冬でした。だが千葉はさすがに暖かいですね。梅も過ぎて、もうすぐ桜です。

春の展示は、市民展につづく「青木コレクション名品展」です。これは栃木県氏家町出身の資産家で徳富蘇峰と親交のあった青木藤作氏が生前に収集された書画を、遺族が郷里に近い馬頭町に一括寄贈されるという美拳を記念して催されるもので、今回が一般初公開です。

展示される作品は、2400点にのぼる青木コレクションのなかから180点あまりを選んだもので、中心は「天童広重」です。これは有名な浮世絵師歌川広重が、天童藩主織田侯の依頼で描いた肉筆風景画のことで、広重晩年期の神経のこもった繊細な詩情の作風がみられます。これまで三十数件知られてたものに、新たに5件、11図が加わり、発見当時新聞に報道され話題となりました。これにあわせて広重の名作「東海道五十三次之内」をはじめ、歌川国貞、同国芳、小林清親ら、幕末・明治初めの浮世絵版画の傑作も数多く出品されます。川村清雄の油絵も見どころのひとつでしょう。川村清雄は徳川の藩士出身で、明治6年から14年までの長い間ヨーロッパに滞在、本格的な油絵の技法を身につけました。本展出品の10点は、そうした清雄の画風が、帰国後伝統的な画題形式に合わせ変貌するさまを興味深く示しています。

これに続いて5月に催される「山下りんとその時代展」は、日本最初の女性聖像画家山下りんの生涯と作品をたどるものです。彼女は明治9年フォンタネージを招いて設立された工部美術学校の最初の女子画学生ですが、ロシア正教会の要請で24歳のとき単身ペテルブルグの女子修道院に入り、イコン画の手法を身につけました。帰国後の彼女の仕事は、もっぱら日本各地のハリストス正教会の注文に応じてのイコン画制作に捧げられました。千葉県八日市場の須賀正教会には、彼女が手がけたイコノスタシス（教会の内部を区切るた

めの障壁）が現在残っていますが、見事なものです。これは礼拝の対象であるために出品依頼を見合わせましたが、この展覧会には北海道の釧路正教会のイコノスタシスの一部（中央の扉）が展示されています。

また、監修者鐸木先生の御尽力により、山下りんがロシアでどのような絵から学んだかを示す資料として、当時のロシアの宗教画の大家ブルーニ、シエミラツキらの作品がペテルブルグの国立ロシア美術館から特別に出品されています。彼女が1891年、日本を訪問した皇太子ニコライに献呈した「ハリストス復活」（エルミタージュ美術館蔵）は、現在ロシアに伝わる唯一の彼女のイコン画ですが、これもエルミタージュ美術館の特別の好意により、展示を許可されました。これらに加え、小田秀夫氏の所有される多数の下絵類など、あまりにも盛りだくさんで、頭のなかで整理するのに戸惑うくらいです。山下りんの研究はまだこれからといったところですが、基本的な資料が

この展示でほぼ出揃ったといっってよく、西洋の宗教画の伝統に健気に立ち向かった一人の女性画家の歩みを、とくと御覧いただきたく思います。

ところで、私事になりますが、このほど当館の館長をやめて多摩美術大学に移ることになりました。開館準備時代を含めて4年の在職は、長いとは申せませんが、その間、さまざまな展覧会を経験し、一度「展覧会屋」になってみたいといっかねてからの念願を果たしたのは無上の仕合わせです。その間の皆様の暖かい御声援も忘れられません。若い学芸員の諸君もその間に経験を積んでたくましくなりました。新しい館長のもとで、これからもさらに意欲的な展示を続け、皆様の御期待に応えていきたいものです。私も必要とあらば御手伝いするのにやぶさかではありません。では皆様、お元気で。

千葉市美術館 館長 辻 惟雄



歌川広重
（首尾之松園）
嘉永年間（1848～54）

青木コレクションの浮世絵

1997年に栃木県馬頭町に寄贈された青木藤作氏のコレクションの中で、最も魅力的であるのは歌川広重の肉筆画であろう。青木氏が親しく交わった明治・大正期の洋画家、川村清雄の作品も、まとまった貴重な一群ということが出来る。そして、コレクション中最も多いのは浮世絵版画である。千葉市美術館で開催される「青木コレクション名品展……知られざる広重の肉筆を中心に」は、以上の三者で構成される。そのうち、清雄については三浦氏に委ね、広重の肉筆画と、浮世絵版画のいくつかについて述べてみたい。

広重の肉筆画で真っ先に挙げられるべきは、織田侯の旧蔵品であった「江都八景」の画帖一冊八図と、「富士十二景」の画帖二冊十二図である。

「江都八景」は、最晩年の作品であるが、画面の中央あるいはそれよりやや高い位置に消失点を設定し、左右と上下に深い広がりを見せる俯瞰構図をとる詩趣豊かな一群である。広重の版画に、扇地紙枠に描かれた円熟期の傑作「東都八景」（間判八枚揃、藤彦版）があるが、それと「江都八景」の副題が三組まで同一で、他も一組を除いて類似の景観を描いていることが確かめられる。おそらく広重は、好評だった「東都八景」を下敷に、それをより純粋により典雅に改めて、織田侯に献上したものであろう。

「富士十二景」は、横中判ではあるが好図の多い「不二三十六景」（三十六枚揃、嘉永4、5年 佐野喜版）に近く、十二図中十図までほぼ同一の土地を採り上げているのが興味深い。「両国橋下」の舟上の二女性を、いわゆる「人物東海道」（中判五十六枚揃、嘉永4、5年 村市版）の人物描写を想起させる。ということは、「富士十二景」も、その二種の版画のシリーズと前後する嘉永4、5年（1851、52）頃に制作されたものと考えてよいと思われる。

縦長の天童広重（天童藩の依頼によって制作された広重の肉筆画）も五点ある。そのうちの三幅対「王子音無川・東都王子不動之滝・

王子滝之川図」の下絵が、大英博物館蔵のスケッチ帖にみられるのも注目されるであろう。

現在帖装されているため、ひとつの見開きしか展示できないのが残念であるが、歌川派の版下絵貼込帖も貴重なものである。広重のほか、一川芳員、歌川国貞の版下絵、合計十九図が貼り込まれている。その中では広重の六点的風景画が特にすぐれ、版下の修正の様子もうかがえ、当時の版画の制作現場がほうふつとしてくる。

広重の版画では、初期の小型の風景画シリーズが珍しい。六角形枠に八景を描き、周囲に狂歌を配した「東都八景」（中判八枚揃）は、出世作、保永堂版「東海道五拾三次」に先行する天保（1830～44）初期の意欲作であり、保存に難はあるものの八枚全部揃っているのは貴重である。扇子形枠内に風景を描き、周囲に狂歌を記した「東都八景」（横四つ切判八枚揃）も、ほぼ同時期でこれも珍しい作品。こちらは三枚ある。懐紙を開いた形の枠内に風景を描いて落款を入れ、懐紙の右または左を内に巻き込んだ形の裏側に作品名を記し、周囲に古歌を記した「近江八景」（中判八枚揃、和泉屋市兵衛版）もコレクションに三枚含まれている。これは保永堂版「東海道」とほぼ同時期の天保4、5年（1833、34）頃の制作であり、錦絵摺と墨の濃淡二色摺が知られている。今回展示されるのは墨二色摺の方で、広重の魅力のひとつである清雅な趣を看取できる。

風景画ではないが、「諸国名産」四つ切判四図（大判にまとめて彫摺され、カットされていない）も見逃せないものである。広重はこの図のような景物画にもすぐれた力量を示し、洒脱でしょんやな作品をたくさん制作している。

広重以外の浮世絵版画で特筆すべきは、北尾重政・北尾政美・勝川春英・歌川豊国の作品である。従来ほとんど紹介されることがなかったという点では、いずれも稀品といってよい。なかでも、北尾政美の「大江山鬼退治」（間判錦絵）は、わずかに一、二枚が知ら

れるのみであったが、青木コレクションに六枚もあるのは貴重である。歌川豊国の中判の二種の「忠臣蔵」のシリーズが、合計四枚あるのも注目されるであろう。明治29年の小林清親による「東京名所真景之内」（大判錦絵三枚続）と題するシリーズも「如月」と「弥生月」の二種類含まれている。このシリーズは明治後期の清親を代表する作品であるが、何故か「陸月」を加えた三種しか刊行されなかったものである。

出品は、浮世絵版画129、広重の肉筆画41、川村清雄の絵画40、合計209点である。この機会に、青木藤作氏のコレクションの精華をじっくり味わっていただきたい。



広重〈江都八景 品川秋月〉安政元年（1854）頃

本館学芸係長 浅野秀剛

川村清雄 — 「和」と「洋」の融合をめざして

西洋の油絵を身につけようとした幕末・明治期いろいろの日本人の画家たち、日本近代美術史の上で洋画家と呼ばれる人々の数は多い。しかし、彼らが歳を重ねるにつれ、日本画に手を染めるケースがよくある。簡単に言えば日本回帰である。洋画家たちは多くの場合、油彩画を習う前に日本画の修業をしているので、大きな障害はなかったようだ。例えば、川村清雄に数年遅れてパリに留学し、10年間も彼地にとどまり、本格的に西洋画を摂取した山本芳翠の場合、帰国後に次第に日本画を描くようになった。アトリエに残された絶筆が、紙に墨の「楊柳観音」と「鯉の滝のぼり」だったというのは、代表的な初期洋画家の最期としてはあまりに寂しい気がする。それはちょうど、若い頃はこってりしたソースをかけてステーキをもりもり食べていた人が、歳をとるにつれ、やはりお醤油でさっぱりと冷や奴（あるいは湯豆腐）がいい、というようなものである。これはよくある話であろう。

しかし、ここに単純な和食回帰を敢然と拒否した画家がいる。あくまでも洋画家として、しかしあくまでも日本人として、絵画制作を貫徹した画家川村清雄（1852～1934）である。日本人の洋画家が、純正の油絵でもなく、純正の日本画でもない方向を模索するとき、大きく言って道は二つある。一つはいわば和風ステーキの道で、美術の世界ではジャポニズム（日本趣味）と言われるのがそれに当たる。印象派の画家たちが浮世絵を取

り入れたように、日本人として洋画に和風の味付けをするやり方で、外国人にはわかりやすく受け入れられやすい。しかし、川村清雄が選んだのはより困難な孤立した道であり、ある意味で彼以降ほとんど試みられていない方法である。それは日本画を油絵の具で描くこと、いわば豆腐のバター焼きを試みる道であった。それも、バターを使っているのに気づかせないくらい、違和感なく異質の要素が混じり合った、和洋融合の新しい絵画だったのである。そのためには、洋画、日本画双方に関する深い知識と技術、そして日本人独自の油絵を創造するという不退転の決意が必要だったに違いない。

その成果の一例を、伝統的な日本画と比較しながら挙げてみよう。江戸時代に関西で活躍した琳派系統の画家中村芳中に《草花図画帖》という優品がある。その中の「七月 芥子」は、無地の背景に芥子の花、茎、葉の一部をクローズアップしたもので、「たらしこみ」で濃淡をつけた色合いがまことに美しい。さて、本展に出品されている川村清雄の色紙《芥子》も、対象を枠に収める形式においては、明らかに江戸の画帖のそれを踏襲しているのがわかる。少なくともその伝統の上で制作されており、加えて金地も使用している。だが、清雄の場合はあくまでも油彩画である。ねっとりしたマチエールが芥子の花卉と葉の表現に応用され、平面的、装飾的な芳中の「芥子」とは異なる、厚みと生々しさを備えたユニークな「花卉画」の世界を提示して



中村芳中《草花図画帖 七月 芥子》江戸後期（19世紀）細見美術館蔵



川村清雄《芥子》昭和初期（1926～34）



川村清雄〈祝詞〉大正末期（1920～26）

いる（もっとも西洋の伝統的な花の絵と比べればその写実性は希薄と言ってもよいくらいだが）。そして、落款と印章の位置には、「CK」（かわむらきよおのイニシャル）を重ねたモノグラムの署名が入っている。さてこれは洋画なのか、それとも日本画なのか。いやそもそも、そうした問いが無意味になる地点で制作された絵なのか。実際、清雄の《芥子》は日本画の題材、形式、支持体に、媒材として西洋の油絵の具を大胆に合わせているのだが、不思議なまでに違和感を感じさせない。いともたやすく「和」と「洋」の融合を達成した感がある。清雄のセンスの良さと技量の高さの賜物である。

色紙だけではなく、それ以外にも、清雄は漆地に油彩を試みたり、木目を生かして板地に描いたり、さまざまな素材の実験を行っている。技法的にも、洋筆やパレット・ナイフのみならず、日本画の面相筆、はては筆の柄や指の腹まで使って、塗りのヴァリエーションを追求している。その結果が、「油としては軽妙、水彩としては濃艶、日本画としては色や陰に力がある」（木村駿吉『川村清雄 作品とその人物』）と評された独特なマチエールとなって結実したのである。1871年から81年まで、アメリカ、パリ、ヴェネツィアと移動しつつ本格的な美術教育を受けた清雄にとって、できるだけ正確に対象の輪郭をとることは基本であったが、賦彩に関してはむしろ自由な筆触を、東洋的な筆勢を楽しむように駆使している。そして構図やモチーフの配置に関しては、斬新で意外性のある造形（ほとんど意匠感覚と言ってよい）を心がけているようである。西洋の画家ではカラー、日本の画家では光琳に敬意を抱いていたのも意外ではない。

清雄のユニークな「油による日本画」の背景にあるものは何であろうか。御庭番の家系に連なる幕臣であった川村家において、各地の重要な奉行職を歴任した祖父修就（ながたか）の存在は大きかった。清雄は祖父の影響下にあった子供時代に、「バタ或

いは珈琲或いは毛布なんかと近寄って居た」（『洋画上の履歴』）ことが、洋画修業の遠因であったと回想している。日本画や和歌など自国の文化教養をしっかりと身につける一方で、幼年期から西洋を感覚的に体験していたことは、双方の特性を生かした絵画創造をある意味で予告しているとも言えるであろう。もう一点、ヴェネツィアで親しくつきあった画家リーコから得たアドバイスがある。清雄の油彩画の上達を認めつつも、「むやみに西洋を取り入れず、日本人の特性を生かすべきだ」と忠告してくれたことを、清雄は感謝の気持ちとともに語っている（『同上』）。確かに、清雄は帰国しても「西洋」を振りかざすことなく、日本の趣味を失うことなく、われわれにしか生み出せない新しい油彩画を工夫し、描き続けたのである。余人の追従を許さぬそれらの達成は、今なお正当に評価されているとは言いがたい。

かつて藤岡作太郎は清雄の絵について、「材は洋にして意は和」（『近世絵画史』）と語ったが、言葉の本来の意味における「和魂洋才」の実例を美術の世界に求めれば、川村清雄をまず挙げねばならないであろう。しかし、そこに「和」と「洋」の器用な結合のみを見ては不十分である。感覚的に完全にこなれ昇華されてはいるものの、異質なもののぎりぎりのせめぎ合いがその底にあるのを、決して見逃してはならない。未だに漱石の文章がアクチュアリティを持つことからわかるように、明治以来の日本人にとって、西洋文化をどういう形で摂取するかという問題はなお解決を見ていないのだが、清雄の残した油絵もまた、われわれにとって西洋とは、日本とは何かという本質的な問題へと誘ってくれる。しかし、こちたき考察にひたる前に、何はともあれ洗練された和製油絵の数々を、極上の豆腐のバター焼きを、まずはとくと味わっていただきたい。それこそが清雄がもっとも望むところであろうから。

（東京大学大学院総合文化研究科助教授 三浦 篤）

山下りんとその時代展

日本～ロシア／明治を生きた女性イコン画家



山下りん 〈ウラディミルの聖母〉 1901年
油彩・板 15.1×12.1cm 小田秀夫氏蔵

日本人ではじめてのイコン画家山下りん（1857-1939）。5月18日より開催される「山下りんとその時代」展は、従来よりも細やかに、そしてより多くの視点からこの作家の足跡をたどります。

りんは現在の茨城県笠間市に生まれました。幼時より絵を愛し、周囲に反対されながらも上京、まずは浮世絵師豊原国周の門を叩きます。浮世絵修業は半年ほどで終え、ついで円山派を学びますがこれも心に染まず、中丸精十郎と出会って「西洋画」にようやく自分の進むべき道を見出します。工部美術学校に入学を果たし、フォンタネーラの指導を受けますが、同校で机を並べていた友人山室（岡村）政子が、りんの境涯を大きく変えることになりました。ハリストス正教の信者であった政子はイコン画家となるべくロシアへ留学することになっていましたが、結婚のためその道を断念、りんにチャンスが巡ってきたのです。りんは「西洋画」を究めようと勇んで単身ロシアに渡りますが、言葉もままならない異国での暮らしは、幸せなものではありませんでした。残された日記は彼女が毎日のように泣き、怒り、落胆する姿を伝えています。何よりも、学ぶべき「イコン」というものが、りんの憧れていた「西洋画」と全く異質であったことが彼女を苛立たせたのです。5年の留学予定を2年ほどで切り上げて帰国したのは、明治16年のことでした。ハリストスの教えを捨て、版画家に転身しようかとも考えますが、結局は神田駿河台の女子神学校に落ちつき、以後イコン画家としての穏やかな日々を送りました。りんの手がけたイコンは日本各地の教会に送られ、今も訪れる者の熱いまなざしを受けとめています。

イコンとは、神の御姿を示した礼拝用の画像を意味します。人の手により「描かれた」ものではなく、何らかの方法で「写された」（キリストの顔を覆った布にそのおもろさが残された、というような）特別な像を起源とし、自らも信者である画手の模写により数を増やし、今日に伝えられてきました。画家には、厳格に定められた手本を可能な限りそのままに、個性を殺して写すことが求められました。山下りんの作品として同じ図柄のものが繰り返し現れ、その多くが無署名であるのは、

こうしたイコンの特殊性を物語っています。従って、そもそもイコンを「作品」として眺めて造形を云々することはその趣旨に反する行為なのであり、そういう意味ではりんは、我々がイメージする「画家」ではないといえます。

しかしながら、創意や表現欲を抑え、神の肖像をひたすらに写す—いわば絵筆を持った機械に徹することは、りんにとって何を意味したのでしょうか。たとえ模写であっても、輪郭をたどり、彩る感触に喜びを感じたでしょうか、それとも—？ 彼女のイコンが時にシュールに、幻想性を帯びるほどに平板に見えてしまうのは、聖像としての理想化があったばかりではなく、生身のモデルを使わず、手本と対面し続けた事実と無関係ではないでしょう。描く対象の写生を旨とする「西洋画」を志したりんが、イコン作者となった己にすっかり満足していたとは思えません。りんの聖像が示すわずかな「独創」—少女趣味ともいえるべき夢見るような瞳の甘い相貌は、洋画とイコンとの乖離にとまどう、彼女の悩みの痕跡といえるでしょうか。

実際、本展にも出品されているイコン以外の諸作品は、りんの全く別の、或いは新たな側面を教えてください。工部美術学校時代のあふげのないデッサンや軽妙なコマ絵、水彩風景の勢いある達者な筆致は、もしもりんに洋画家としての道が用意されていたなら…と思わせる完成度を備えています。本格的な油彩画を学ぶことなくロシアに渡ったりんですが、日本で勉強を続けていたら、モデルにくらいついてどんな仕事を残したのか、見てみたい気がします。

本展は、イコンに加えて浮世絵修業時代の習作や工部美術学校でのデッサン、版画下絵などを集めて山下りんの全画業を紹介します。またフォンタネーラ師匠や明治前期の女性作家、さらには19世紀のロシアイコンにまで視野を広げ、画家の周辺を見つめ直します。200点を超える作品群から、明治という極めて特異な時代に絵を志し、複雑で、とても魅力的な物語を抱えたひとりの人間の歴史をどうぞご覧ください。

（本館学芸員 西山純子）

展覧会スケジュール

【休館日】月曜日（祝日の場合はその翌日）年末年始 展示替期間中
 【開館時間】午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）
 【ハローダイヤル】043-227-8600

◆青木コレクション名品展 知られざる広重の肉筆を中心に

3月30日(火)～5月9日(日)

※ただし5月3日(月)は開館、6日(木)は閉館

【右】川村清雄《紫雲観音》昭和初期（1926～34）

【左】歌川広重《富士十二景 目黒千代か崎》
嘉永4～5年（1851～52）頃



青木コレクションは、栃木県出身の青木藤作氏が収集した美術品など4200点に及ぶコレクションです。その内容は浮世絵版画、歌川広重の肉筆画、川村清雄の絵画、徳富蘇峰の書など多岐にわたります。このコレクションは、長らく未公開でしたが、1997年に栃木県馬頭町に寄贈されたことから、一躍、全国の注目を集めました。

本展では広重の肉筆画を中心に、政美、豊国、国貞、広重、国芳、清親らの浮世絵版画、そして川村清雄の油彩画などの約200点を通じて青木コレクションの精華を紹介します。



喜多川歌麿《納涼美人図》寛政6～7年（1794～95）頃

千葉市美術館所蔵作品展

◆江戸の華 —肉筆浮世絵の世界—

3月27日(土)～5月9日(日) ※ただし5月3日(月)は開館、6日(木)は閉館

流麗で繊細な墨線、鮮やかで豪華な色彩感覚を特徴とする浮世絵の肉筆画。ここからは、浮世絵師の生々しい感覚が新鮮に伝えられ、版画とは別趣の魅力を放っているようです。今回は、当館が所蔵する作品の中から、近世初期風俗画を交え約50点の肉筆浮世絵を展覧いたします。（期間中一部展示替があります）

◆山下りんとその時代展

日本～ロシア／明治を生きた女性イコン画家

5月18日(火)～6月27日(日)

現在の茨城県に生まれた山下りんは1880年にロシアに渡りイコン（キリスト教の一派である正教が用いる聖像画）を学びました。約2年の修業ののちに帰国した彼女は全国各地に竣工されたハリストス正教会のためにイコンを制作しています。本展では日本初のイコン画家としてのみならず、明治の女性洋画家というふたつの側面に注目し、彼女の全業とその周辺の絵画を検証するものです。

山下りん《聖母子とヨハネ》制作年不詳
小田秀夫氏蔵



◆甲斐庄楠音展（仮称） 6月29日(火)～8月1日(日)

■展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。

美術館の所蔵作品より



村井正誠 《歴史》(1984~93) 200.0×800.0cm 油彩、カンヴァス

去る2月5日、93才で亡くなった村井正誠氏(1905~99)の作品。

この作品では左側から順に人生のさまざまなできごとが線の表情に集約され、象徴されている。それぞれの線は他の線と結びつき、ひとつのかたちを構成する。そのようなかたちがいくつも並び、画家の経てきたみちすじ—歴史—が描かれている。作者は若き日、マチスやモンドリアンの影響を受けていた。その痕跡は、この作品においても白い地と黒い線、あるいは原色の色面の対比に見ることができる。

もっとも、この作品には欧米の近代絵画の要諦、つまり「カンヴァスという物理的に限定された平面空間」という意識はない。一点の作品として成立はさまざまな段階を経ている。1984年にはじめて画廊で発表された際には画面の左から三分の二ほどがカンヴァスごとに離されて展示されていた。その後ひとつの作品として纏められ画集や展覧会で発表されるようになったが、このりの部分は93年に制作されている。それはまるで、散逸していた歴史書の断片をつなぎあわせ、欠けた部分を補い、ひとつの年代記を編む作業に似ている。

村井氏は1970年代の半ばごろより、このような横長の画面で「私の履歴書」と題した作品をいくつか制作している。それらには右端に一本の横にのびる黒い線が描かれており、じしんの「死」をイメージしたものであるとかつて聞いたことがある。しかし、そのイメージはげんに生きている画家が描くには虚構に過ぎず、自らの道程をテーマとして抽象的形態に昇華させた作品にはそぐわない意味内容ではないだろうか。結果的に本作品は1993年の時点の加筆で「死」をイメージさせる要素は描かれず、他の類例作品とは異なり、ある意味では「開かれた」ままに了っている。

末尾ながら謹んで村井氏のご冥福をお祈りします。

(本館学芸員 薬科英也)

美術館ご利用案内

1-2階 SAYA-DO HALL
さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物(ネオ・ルネサンス様式)を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階 MUSEUM SHOP
ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7階 AV CORNER
映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧ください。

10階 ART LIBRARY
図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

[開室時間] 10:00~18:00

11階 RESTAURANT
レストラン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

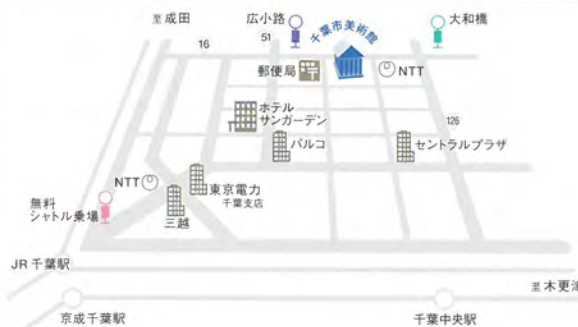
[営業時間] 11:00~21:00

●JR東日本千葉駅利用

▲東口より徒歩15分 京成バス大学病院行(のりば⑦)「大和橋」下車徒歩2分
▲京成バス矢作台市営住宅・川戸行(のりば⑦)または小湊バス八幡宿駅行(のりば④)「広小路」下車徒歩1分 無料巡回シャトルバス・チーバス(のりば⑩)「中央区役所・美術館前」下車11:00~18:00の毎時05分と35分に発車(水曜日運休)

●京成電鉄千葉中央駅利用

▲東口より徒歩約10分



☎260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8 発行日:1999年3月31日

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

[ご案内] NTTハローダイヤル 043-227-8600

Publication: 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba city, Chiba pref. Japan zip.260-8733

制作・印刷: 株式会社 松翠堂